

## 第15回アジア女性会議 北九州

### 第1分科会



#### 司会

たいへんお待たせいたしました。ただ今より第1分科会を開会いたします。テーマは、「平和構築を通じて人びとの安全をどう保障するか～紛争予防・解決～」でございます。初めに、討議を行っていただく皆さんをご紹介します。

それでは、この第1分科会の議事・進行、それから取りまとめ役を務めていただきますコーディネーターをご紹介します。財団法人アジア女性交流・研究フォーラムの客員研究員で、名古屋大学大学院国際開発研究科教授の佐藤安信さんです。

引き続きまして、パネリストのご紹介をいたします。最初は、フィリピンからお越しのミンダナオ女性委員会議長のアイリーン・サンチャゴさんです。引き続きまして、日本赤十字九州国際看護大学教授の喜多悦子さんです。最後に、恵泉女学園大学助教授の古沢希代子さんです。皆様、どうぞよろしく願います。

また、会場にお越しいただきました皆様からも、できるだけ多くのご意見を頂きたいと思っております。受付に質問票がございますので、後ほどの休憩時間に、ご記入のうえ、受付の回収箱にお届けください。皆様の積極的なご参加をお待ちしています。よろしく願います。

なお、この分科会の討議結果につきましては、このあと引き続き行われます全体会でご報告いたします。それでは、進行をコーディネーターの佐藤先生に引き継ぎたいと思います。どうぞよろしく願います。

## 佐藤 安信



どうもありがとうございました。名古屋大学の佐藤です。今日は朝から、皆さん、どうもご参加いただきましてありがとうございます。午前中のセッションでは、猪口先生の方から「女性はみんな逆境に立っている」ということを聞いて、ハッと思った次第なのです。今見ますに男性はマイノリティーで私自身もここではマイノリティーで

すが、マイノリティーになってみると何となくこう少し緊張なんかしたりして、やはりこういう経験をする機会があってよかったなあと思っております。そういう思いを共有していきたいなと思います。それで、よろしければぜひ前の方に来てください。みんな顔が見える範囲でできれば議論していきたいと思います。

それです、進行について一応ご案内させていただきます。まず、私のこのあいさつが終わったあと、喜多悦子先生の方から 20 分、「平和を壊すのは誰か、そして誰が平和をつくるのか」というテーマでお話しいただきます。その後引き続きまして、古沢希代子先生から「女性の安全はなぜ保障されないのか。東ティモールの経験から」ということで、やはり 20 分ほどお話し頂き、最後にアイリーン・サンチャゴさんの方から「人間の安全保障と紛争予防、紛争管理と平和構築」ということで、お二人の事例研究や現場を含めた議論を、ある種包括的に、理論的な見地も含めて議論いただきます。

そしてそのまますぐに休憩に入る前に、各パネリストの方が 5 分ほどの持ち時間で、それぞれの他のパネリストの方への質問ないしコメントをいただくということで若干このパネルの方でも話をしてみたいと思います。そして 10 分ほど休憩を入れまして、その間、ご質問等をぜひ質問票に記入していただきこちらにいただければ、私の方で質問・議論などを整理いたしまして、休憩後に質疑応答・議論ということですので。多くの質問があると思いますので、あるいは全部取り上げることできないかもしれませんが、できる限り質問にお答えし、なおかつ、フロアの方からの議論をいただくというかたちで、できるだけ全員参加で話を盛り上げていきたいと思っています。

ということで、パネリストの方、先ほど打ち合わせしましたように、通訳が入っておりますのでできるだけゆっくりお話しいただくということ。それから時間の方は最大 20 分ですが、できれば 15 分ぐらいで終わっていただければあと余裕ができますので、時間の管理とゆっくりお話しするという、なかなか話す方としては難しいことなのですが、そのために私がいるということですので、15 分を過ぎましたら多少目配せなり何なりいたしますのでよろしく願いいたします。

それでは「平和構築を通じて人びとの安全をどう保障するか～紛争予防・解決～」という題で、パネルディスカッションを始めたいと思います。

私自身、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）でカンボジアに行っておりました。人権担当官ということで、先ほどお話があった地雷とか小火器によって犠牲になる子供たち、女性たちを目の当たりにしてきたわけです。喜多先生は、私以上にいろいろな紛争地を回られ、特にアフガニスタンなどでも非常に大変なご苦労をされ、非常に経験豊富でございます。そういったご経験を踏まえて、その紛争がもっている課題、その一連の問題というのを明らかにしていただきたいと思います。それでは喜多先生、よろしくお願いいいたします。

## 「平和を壊すのは誰か、そして誰が平和をつくるのか」 喜多 悦子

佐藤先生、ありがとうございました。まず、このような素晴らしい会を開かれました原先生、三隅先生、本当におめでとうございました。またここで、大変高名なサンチャゴさんと一緒にお話できることを大変うれしく思います。



では、私のタイトルは「平和を壊すのは誰か、誰が平和をつくるのか」。平和というものは、もしあるとしたら、勝手に壊れるわけではないと思います。誰かが何かをするから壊れているというふうに思います。逆にまた平和をつくるというのは、誰かがそれを守ろうという意識を持っているからつくれるものだというふうに考えます。今日は、こういうことに関して、大変、私の心の中に残っているルワンダを例にお話をいたしたいと思います。

ルワンダというのはアフリカの真ん中にある小さな国で、千個の丘のある国と言われています。アフリカの真ん中、赤道に近いのですが、比較的高い所にあるのでしのぎやすく、また、アフリカの果樹園とも言われていて、とてもきれいな国です。ここで 1994 年に、第二次世界大戦後最大と言われた大きな人道の危機がございました。その同じような言葉が、今はスーダンに向けて使われておりますけれども、そういう紛争というのはいつでもあちこちにあるということも一つ申し上げたいと思います。

私は 94 年にルワンダに行ったわけではありませんが、その後、WHOの緊急人道援助部、(Emergency and Humanitarian Action) というところで、そのような紛争地の保健医療担当をしたとき、最初に行った国がルワンダでございました。そこで見たものをお示しいたします。

ルワンダの首都の郊外にある教会なのですが、ぜひそこに行こうと地元の NGO から誘われました。その教会は、ルワンダはもともとフランス系の植民地でありまして

フランス語なのですが、「エグリーズ ヌタラマ」と書いてあります。ヌタラマ教会です。ここは、非常に大きな虐殺、ジェノサイドが行われたところです。

教会の中は、数年たっていましたけれども、まだ当時の様子がそのまま残っている状況でございました。あちこちに人骨が残っています。画面に見える白い物は骨なのです。この写真には写っておりませんが、小さな子供の骨と思われる頭がい骨も見ました。この教会では、何千人もという数字を聞きましたけど、実際に広さからすると何千人という数字は入り得ないと思いましたが、相当たくさんの方が殺されたことは事実であります。

教会の外には粗末な小屋がありまして、そこに骨が並べられてある。なんと言いますか、この中にもありますが、この骨は頭の真ん中に傷が入っております。このように、頭が鈍器、強い力で殴られたあとがあるわけです。これは左の目の穴から後ろに向かってナイフが刺さっています。これは頭の骨の真ん中が割れていますが、こういう異常な殺され方の証拠があるというのが、ジェノサイド～大虐殺です。骨がたくさんあるからジェノサイドではありません。異常な殺され方をしているという証拠が必要だとされます。

この教会に参りましたときは、私は案内の地元の女性の方と二人だけだったので、松林の中にある教会の外に出たとき、目まいがする思いをいたしました。どうして人はこんなことができるのか。そして、確かにルワンダの人道の危機は、ツチ族・フツ族という民族闘争に色分けはされていますけれども、実際はこういう紛争が起こるまで、人びとは仲良く暮らしていたということもたくさんの方から伺いました。その仲良く暮らしていた人同士が、どうしてこういう悲惨なことに走るのか。それが私は大きな憤りと共に、大きな疑問として自分の胸に残りました。

これは、その教会から1キロぐらいあるところの湿地帯であります。行ったときには子供が魚釣りをしておりました。後で申します地元の女性が、実は教会に呼ばれた男性は、紛争を避けるために教会に隠れましようと言って呼び出しを受けたと。そして、そこを対立するグループから襲われた。女性たちは、その「逃げましよう」と言うその呼びかけからすでに見捨てられていた。そして私たちはこの湿地帯に身を潜めましたとおっしゃっていました。別にワニのようなものがあるわけではありませんけれども、やはり虫やヘビやそういうものがある中に三日三晩身を潜めて、難を逃れました。しかし、自分たちが表に出てきたときには、家族の男性たちは全部殺されていましてとおっしゃっていました。

そして、父親が、あるいはお兄ちゃんが殺された後の子供、その子供たちは逃げまどった揚げ句、いわゆる見捨てられた子供として、これはUNICEFの子供キャンプですけれども、こういう子供が親を探しているという写真があっちこちにまだ貼ってありました。1つの子供のキャンプを訪ねましたけれども、確かに屈託なく子供たちは遊んではいました。しかし、よく聞いてみると、夜になるとやはり怖がる子供が多い。医学的に申しますと、PTSD (Post-Traumatic Stress Disorders) と思いますけれども、ちょっとした風の音でテントがはためいても突然泣き叫ぶ子供がいるとおっしゃっておられました。こういうふうに、男たちは殺される、女たちは逃

げたけれども、今度出てきたときにはどうしていいかわからない状態。そして子供たちはこういうみなし子になっているという社会ができていたわけです。

すぐ近くの、ピースビレッジ、ネルソン・マンデラ、ネルソン・マンデラ平和村というところに参りました。ネルソン・マンデラ元南アフリカ大統領のお名前は大変有名でありますので、ネルソン・マンデラあたりはみんなが分かる村だそうでございます。その村の様子はこんなものですが、建物があるだけでは、私はコミュニティではないと思いました。ここ、実は、人はたくさんいましたけれども、非常に寂れたと言いますか、活気がない。建物があればそれで人びとが生活できるというものではないということを感じさせられる雰囲気でありました。この村の中には井戸もあって、人びとは小さな部屋ですけども、鍋、釜、そして燃料をもらって生きていくことはできるはずですが、けれども、人びとの言葉を聞きますと、この人たちは生きていない。生物として生きているかもしれないけど、人間として生きていないという思いがいたしました。

これは、そのとき一緒にその教会に行ってくれた、その村の住人たちですが、この後ろに座っているのは、私たちが乗っていった車の運転手さんです。そして、私の隣に座っているこの方が、地元のNGOでこの村を支援している方で、案内してくださったのです。後は全部女なのです。男というのは、大体10歳以下の子供、それがネルソン・マンデラ平和村の状態でありました。女性たちは、確かに紛争は終わった。ここではもう戦いはない。しかし、自分たちはきちんと生きてはいないというふうに言っていました。平和というのは、戦いが無いというだけではいけないのだということを感じさせられるところでした。

そのような思いを持って、その後もたくさんの紛争地で仕事をしましたが、思い返してみますと、「戦争の惨害から将来の世代を救い」とか、「国際の平和及び安全を維持する」というのは、日本の憲法ではなくて国連憲章の前文に高々と書かれています。これが国連憲章の前文の英語ですけども、“ Save succeeding generations ” 「次の世代を」、「 From the scourge of war 」 「戦争の災害から救おう」と。それからすでにもう60年がたとうとしているのに、ほとんど変わっていないことがあるように私は思います。その国連憲章の第1条の目的として、「国際の平和及び安全を維持すること」と明確に書かれています。これもその英文でございますけれども、“ To maintain international peace and security ”、この場合の“ Peace ”、あるいは“ Security ”という言葉は、恐らく人間のではなくて、国の“ Peace ”であり、国の“ Security ”というふうに私は読めます。しかし、そういうことをうたったのは、もう60年も前ではないかという気がいたします。これが署名されたのは1945年、発効したのが同じく45年の10月、日本がこれに参加したのは、それから7年後の1952年です。それからすでに半世紀はたっていることになります。

一方、日本国憲法をよく読んでみますと、国連憲章とよく似た文言が並んでいます。まるで、1945年から47、8年ごろには、こういうことが流行と言うとちょっと語弊のある言い方も分かりませんが、戦争の惨禍が起こることのないように、「恒久の平和を願い」という言葉は、国連憲章だけでなく、日本の、私たちの憲法の中にも明らかに入っているわけです。これも、1946年、47年、50年以上前の話であり

ます。

そのようなことに気付いて、私は一体ほかの国連はどんなことをやっているのかと、いろいろな国連の憲章を読んでみたことがあります。その中でもっともピンときたのが、UNESCO憲章です。その前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」という文言があります。これはちょっと英語で言いますと、“ Since wars begin in the minds of men ”、この“ men ”を「人間」と訳するのか「男」と訳するのか、私はアフリカに行った場合に、ここはやっぱり men は「男」かなと思うことが多ございました。とにかく、人びとの心の中に戦争は起こるんだ。だから、それを防ぐためには、人びとの心の中に平和の砦を築かなければならないというのは、大変私は納得がいくし、やらねばならないことのように思います。これは、1945年、第二次世界大戦が終わった年の11月にアダプトされています。

そこで、今回こういう会に招いていただきまして、考えてみたのです。平和とは、一体何なんだろう。どんな状態なのか。どうして私たちは平和を必要としているのか。なぜ平和が脅かされ、誰がそれを壊すのか。どうしたらそれを防げるのか。どうしたら壊れた平和を取り戻すことができるのか。そういうことを考えてみました。しかし、どれも的確に答えることは私にはできません。しかし、何かしなければいけないという気持ちは強くあります。

私自身、第二次世界大戦後、もう大戦の終わりのころに幼児期を過ごしましたので、第二次世界大戦のあと、いわゆる日本が復興期に小学校時代を過ごしております。という意味では、紛争というのはそれほど遠いものではなくて、私の経験の中に生きています。

90年代のアフリカの紛争を振り返ってみますと、私が今お話しした、1994年のルワンダの人的危機より前にもソマリア、アンゴラ、あとに同じ年ですけど、ブルンジ、ザイール、エチオピア、エルトリアの戦争、それから、スーダン、シエラレオネ、そして私はWHOで働いていましたときには、そのザイールは国の名前がコンゴ民主共和国と変わる国内の紛争がございました。決してルワンダだけが問題ではないというふうに思います。しかも、こういう、先ほど基調講演でありましたように、昔の戦争は国と国が覇権を争ってやるということでしたけれども、今起きている紛争、戦争と言うよりも地域紛争は、非常に戦いが身近にあります。すぐそばで暴力的なことが起きている。そうにもかかわらず、どうしてそれを解決することができないのか。解決できないだけでなく、紛争は大体遷延しております。そして新たな紛争を予防することもできません。

世界で紛争が本当に終わった国というのは、モザンビークとか、カンボジアとか、あるいはアフガンもこれからそうかもしれませぬ。しかし東ティモールは、これから古沢先生がお話しになりますが、本当に戦争が完全に終わったと言える状態には私はまだほど遠いのが事実ではないかと思っています。

私は保健分野の人間でございますので、先ほどの猪口軍縮大使のような仕事はでき

ません。保健分野で何ができるのかということ、今の職場の日本赤十字九州国際看護大学の仲間と少し勉強を始めております。平和を脅かす、あるいは紛争行為に至る人びとの心の動き、あるいは地域の精神衛生。そういったものをどうやって調べる、あるいは知ることができるのか。そういう新しい方向のアプローチが必要でないかというふうに考えています。その非常に、一番ベーシックな根本になるところに、私は一人ひとりの人を、どうその地域社会が扱っているのか、ジェンダーやヒューマンライズといった言葉は、まさにその地域社会をつくっていく、物質を作っている元素のようなものではないかというふうに考えております。

どうもご清聴ありがとうございました。

佐藤

どうもありがとうございました。映像と共に明確かつ、ある種衝撃的なお話でもありましたし、いろいろな意味でまた問題を投げかけていただきました。特に時間をぴったり守っていただくというのは、さすがだなと思いました。

では、引き続きまして古沢先生の方に東ティモールを題材にしてお話しいただきたいと思います。ちなみに私は古沢先生とはもう随分、まだ私が若いころというか...

古沢希代子  
お互いに。

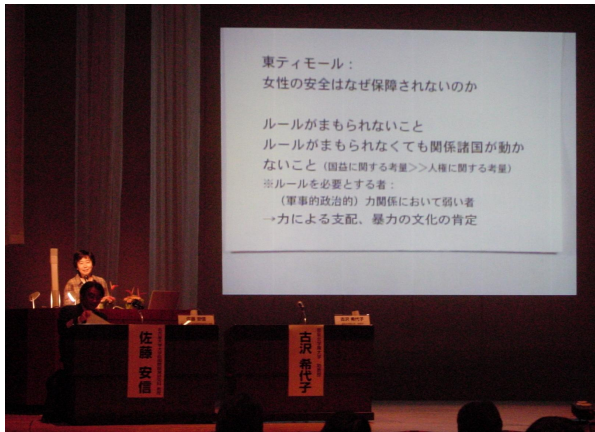
佐藤

お互いに。先生はまだ若いですが、NGO活動の中で知り合って、当時、私がボランティアでやっておりました東京の自由人権協会というところで、東ティモールという小さな地域があって、独立をめぐる闘争があってという話を聞き、当時全くそういう知識がなかったものですからとても驚いた経験がございました。それが2002年に独立を果たして、今まさに平和構築の真っ最中だと思っておりますが、その中でまさに中心的に活動されておりますので、その辺の現実を踏まえたお話を聞けると思っています。では古沢先生、よろしく願いいたします。

## 「女性の安全はなぜ保障されないのか-東ティモールの経験から」 古沢 希代子

佐藤さん、ご紹介ありがとうございました。私は喜多さんとサンチャゴさんに初めてお目にかかることができるとてもうれしいです。と言いますのは、私は今、東京の恵泉女学園大学で教員をしているのですが、喜多さんとKFAWの原会長がお書きになった『開発と健康』という本を2年ゼミの学生たちと読ませていただいています。それからサンチャゴさんのお仕事もとても尊敬しています。1995年に北京で国連世界女性会議が開催されたときに、NGOフォーラムが併設され、在野で活動している

4万人以上の女性たちが世界から参加したのですが、サンチャゴさんはその NGO フォーラムの指揮を執られました。私はその会議に東ティモール人の女性たちと一緒に参加をして、当時インドネシアの占領統治下にあった東ティモールの実情を訴えたり、インドネシアから参加している NGO の女性たちと何かいっしょにできることはないか相談することができました。ということで、今日はお二人にお会いできてとても光栄です。



私がしてきた仕事ですが、私は 1984 年に小さな市民団体を大阪で立ち上げて東ティモールの問題にかかわることになりました。ですから、かれこれ 20 年近く東ティモールとつきあっています。この近くにも仲間がおりまして、下関と、それから長崎と大分にも東ティモールの支援グループがあります。さらに、私たちは東ティモール問題を世界中にしらせるために国際的なネットワークをつくってきました。その国際組

織、国際東ティモール連盟 (International Federation for East Timor) が国連広報局の協議団体として認められたのは 1991 年のことになります。この国際東ティモール連盟は、1999 年に国連による住民投票が実現したときには、のべ百数十名の投票監視ボランティアを現地に送り込む最大の公認投票監視組織となりました。私たちの長年にわたる取り組みが、最終的に住民投票の監視活動に集約されたことは一つの成果だったと思います。しかし、私たちはこの住民投票の実施の方法に全然満足しておりません。関係諸国による国連への協力には足りないところが山ほどあり、そこを変えられなかった市民社会の責任を痛感するからです。今日は皆さんになぜ 1999 年の住民投票が国連の成功例と呼べないのかご説明したいと思います。

まず、東ティモールの地理的な位置を確認します。東ティモールは、ちょうど東南アジアと太平洋の境にあり、オーストラリア大陸の北方に位置するティモール島の東半分 (と西にある飛び地のオイクシ) を占めます。面積は四国ぐらいで、とても小さい国です。独立前の人口は、70 万から 80 万ぐらいでした。では人々はどのような紛争を経験してきたのでしょうか。東ティモールは、2002 年の 5 月に独立するまで、約 4 世紀もの間、外国の支配下にありました。まず、ポルトガルの植民地とされ、第二次世界大戦中は日本軍が占領し、戦後日本軍が出ていくとポルトガルの統治が復活しました。しかし転機が 70 年代半ばに訪れます。1974 年にポルトガル本国が民主化され、植民地解放の方針が打ちだされたのです。東ティモールでも本格的な独立運動が開始されました。ところが、次に介入してきたのが、隣国の大国、インドネシアだったのです。

まずご理解いただきたいのは、この 4 世紀にもわたる外国の支配が東ティモールに大きな負の遺産を残していることです。別の言い方をすれば、他国に大きく遅れて、2002 年に独立し、この時点から新しい国をつくっていくのはどれだけ難しいかということにもなります。では、何が問題なのかということ、長年にわたる他国による占領



統治が人びとを分断してきたことです。午前中のセッションで猪口さんが、国と国との間の戦争に対して冷戦後に深刻化したのは国内紛争で、国内紛争は一般の人々を巻き込むためすごく人に傷を残すのだというお話をされました。外国による占領統治というのはその真ん中にあるのですが、これもものすごく人びとに傷を残します。というのは、人々は外国人の占領者に協力するのか、あるいは抵抗するのか、選択をせまられます。そして、占領者はその協力者を優遇し、また、協力者を使って徹底的に抵抗者を弾圧するからです。分断支配は時代や地域を横断する普遍的な手法です。例えばナチスがヨーロッパで勢力を拡大してきたときに、占領地域の人たちが、例えばフランスの人たちもナチスへの協力・非協力で分断されました。ユーゴでも各勢力は対立し、その際の凄惨な暴力が、1990年代の紛争に尾をひいているといわれています。

他国による占領統治が遺した傷はさまざまですが、特に強調したいのは、占領軍から性的に蹂躪（じゅうりん）された女性たちの存在です。そういった女性たちは、被占領国の協力者によって占領軍に提供されることもあります。例えば、インドネシア軍の将校に差し出されたある東ティモール人女性の場合です。本人は命を懸けて抵抗したのですが、すると、同じティモール人、具体的には村長と隣組の役員がやってきて、「おまえがそうやって抵抗し続けると、村がどういう報復を受けるかわからない。自分たちも殺されるかもしれない。どうかみんなのためにあきらめてくれ」と頼んだそうです。結局、その女性は、それから3人の軍人に仕えさせられることになりました。しかし、そういう事情があったにもかかわらず、その女性は村の中で「インドネシア人の女」とか「インドネシア軍のスパイ」と陰口をたたかれたのです。彼女は今その汚名を晴らしたいと願っています。私が彼女の証言を聞いたのは東ティモールの受容真実和解委員会での女性に対する暴力の公聴会が開催された時です。東ティモールでは、このような機会をきっかけに、女性の被害者が少しずつ声を上げ始めています。そして、占領下で女性たちの身に起こったことや東ティモール人がどのようにその犯罪に加担させられたのかが明らかにされつつあります。そういった女性たちにとって、罪を認めて謝罪して欲しいのは、インドネシア軍の関係者だけではありません。同じ村でいっしょに暮らしているかつてのインドネシア軍協力者がそういった過去の行為を謝罪することによって、自分が決して売春婦ではなかったことを人々の前で証明してもらいたいのです。

前置きが長くなってしまい、すみません。残りの時間で、いかにこの間、国際社会が東ティモール問題に対して冷淡だったかお話をさせていただきたいと思います。

東ティモール問題の本質は、東ティモールがポルトガルから独立する過程で隣国インドネシアの侵攻を受けることで、独立のプロセスが頓挫したということ、そしてインドネシアの一方的併合が既成事実化する中で、インドネシアによる占領統治に反対する人たちに対する人権侵害が永続したということです。他国による不法な占領がこうした事態を引き起こすことは歴史が証明してきたことです。ですから、国際社会は団結してこうした事態に対処しなければならないことは、先ほど喜多さんが紹介してくださったように、国連憲章にも明記されているあることです。しかし東ティモールの場合はそういうふうには動きませんでした。国連では総会も安保理もすぐに動きました。国連総会は、75年から82年まで8回、東ティモール住民の民族自決権を確認し、当初はインドネシア軍の即時撤退も要求しました。インドネシアによる一方的

併合の宣言も拒否しました。しかし、インドネシアはそれらの項目をことごとく拒絶しました。

問題は、インドネシアに対して影響力があると考えられる諸国が、インドネシアに対して国連決議を尊重するように働きかけをしなかったことです。実際に起ったことはむしろ逆で、例えば、日本、アメリカ、オーストラリア、イギリス、フランスなどは、東ティモール侵攻後も、インドネシアに対して経済援助や軍事援助を続けました。インドネシア軍は、侵攻後、東ティモール全土を封鎖し、抵抗派の掃討作戦を実施し、そこで人口の3分の1ぐらいの人たちが戦闘や飢餓で犠牲になります。この掃討作戦で利用されたのが、西欧諸国から提供された対ゲリラ戦用の最新兵器、例えば、低空飛行用の戦闘機、戦闘用ヘリコプター、ナパーム弾などでした。その結果、大変な人道危機が起こったのですが、そういった事態が起こっても、それらの国々は基本的にこの問題に対するスタンスを変えなかったのです。

さらに私たちを落胆させたのは、中立的であるはずの国連機関の対応でした。インドネシアが東ティモールを軍事的制圧すると、占領統治の一貫としてさまざま政策が打たれるようになります。そのひとつがインドネシアによる人口管理政策でした。この政策はインドネシア全域的なもので世界銀行や国連人口基金が支援していました。ところが世界銀行や国連人口基金は、軍事占領下の東ティモールでインドネシアが人口管理政策を実施することがどういう意味を持つのか問題にせず、プログラムの執行をインドネシア政府に任せてしまったのです。国連がインドネシアによる一方的併合を認めていないにもかかわらずです。東ティモールで実際に起こったことは、避妊の強制や説明の欠如などの人権侵害です。その結果、家族計画の本来の意味は人々の間にひろまらず、また、「わけのわからない注射や手術をされるから公立病院は怖い」とか「家族計画は身体に悪い」といった認識がひろまり、医療機関から人びとの足を遠ざける効果を与えてしまいました。

ですから、当時、私たちは、こういった状況の中で、東ティモールの人たちの人権を守るような手だてを何かひとつでも確保できないか考えました。

ひとつは、猪口さんも触れた軍縮にかかわる行動です。いつまでもインドネシアに対して軍事援助を提供していてよいのかということです。この流れを変えるには、軍事援助や武器売却を行なっている国の市民がそれぞれの政府にはたらきかける必要がありますので、アメリカ、オーストラリア、イギリス、フランス、オランダ、スウェーデンなどのグループがキャンペーンの中心になりました。画期的だったのは1992年のアメリカ大統領選挙です。この選挙でクリントンは初当選したのですが、このときも私たちは祈るような気持ちで選挙結果を見守っていました。というのは、アメリカの仲間たちが、クリントン候補と東ティモール問題について協議をかさねていたからです。その結果、クリントン候補は東ティモール問題に関して公約を出しました。その公約とは、アメリカがインドネシアに対して実施してきた軍人の教育訓練プログラムの一時停止と、国連人権委員会におけるアメリカの投票行動の見直し、つまり、東ティモールにおける人権擁護の強化につながる具体的な措置を国連が打つことにアメリカは賛成するということです。クリントンは当選し、その公約は実施されました。ところが、インドネシアは冷戦後に需要が落ち込んだ世界の兵器産業にとっ

てきわめて重要な顧客でした。例えば、統合後のドイツは東ドイツ製の中古の潜水艦を、イギリスの戦闘機メーカーは最新の戦闘機を、インドネシアに対して売り込みました。そのように兵器を売ろうとする国は、議会や世論対策として東ティモールの人権問題を過小評価する傾向もありました。ですから、「人権侵害国に武器を売らない」という私たちのキャンペーンは決して平坦なものではありませんでした。

もう一つは、東ティモールの閉鎖状況を打破するために、人権に関する国連の特別報告者にできるだけ東ティモールに入ってもらうことです。そのためには国連人権委員会の決定をへなければなりません。ですから国連人権委員会のメンバー国に対するはたらきかけが必要になります。90年代に一歩進んだことは、超法規的処刑、拷問、非自発的失踪、女性に対する暴力などに関する特別報告者が東ティモールの地を踏んだことです。

しかし、包括的な和平が成立しなければ人権侵害に終止符は打たれません。そのためには和平交渉が開始されなければなりません。東ティモールの抵抗派勢力は80年代末から交渉の呼びかけをしていました。1992年には段階的和平案も提示されました。しかし軍事的に優位に立つインドネシアは抵抗派の呼びかけを無視し続けました。問題は、インドネシアと密接な関係を持つ国々がスハルト体制を支え続け、和平の枠組みを構築することにきわめて消極的だったことです。冷戦後、ナミビアが独立し、グアテマラ、パレスチナ、カンボジアで和平推進されましたが、東ティモールは「和平」や「交渉」のかやの外に置かれ続けました。

最期に1999年に国連が実施した住民投票の問題点を指摘します。

1998年、インドネシアに32年間君臨したスハルト政権が崩壊しました。インドネシアの東ティモール政策にも転換のきざしが現れ、最終的にはインドネシア政府が提案する東ティモールの自治案をめぐって国連が住民投票を実施するということにこぎ着けました。ところが、この住民投票は治安管理の方法に大きな問題がありました。インドネシアは国連平和維持軍の受け入れを拒否し、インドネシアの警察が治安管理を担うことになりました。ではインドネシア国軍は退いたのかといいますと、インドネシア国軍の駐留はそのままでした。国連での合意では国軍も警察も中立を守るという約束だったのですが、大方の予想どおり、この約束は守られませんでした。国連の文民警察官は現地に派遣されたのですが、その任務はインドネシア警察への助言であり、武器は携行せず、逮捕権や捜査権もありませんでした。つまり、国連はこの住民投票に国連スタッフと住民をまもるための中立公平な治安管理を保障することができませんでした。その直接的原因はインドネシアの頑なな態度ですが、それを変えることができなかった背景には関係諸国のはたらきかけの弱さが存在していました。結局、反独立派の民兵組織によるテロは取り締まられないまま、継続しました。投票の直前、国連はすべての武装勢力に宿营地での禁足を命じますが、それを遵守したのは独立派の武装組織だけでした。

住民投票は世界中からかけつけた報道機関と投票監視ボランティアの助けもあってなんとか実施できたのですが、開票結果が発表されると、敗れた反独立派の民兵とその後ろ盾になっていたインドネシア軍が一体となって、独立派に対する掃討作戦を

始めます。そして全土で、家を焼く、壊す、盗む、人を殺す、レイプするという暴力の嵐がふきあれました。この事態は安保理の決議によって多国籍軍が投入されると終息します。一般にはここで問題はひと段落したと思われていますが、それは間違いで、同じ人々による暴力が別の場所で続いています。

その場所とはインドネシア領の西ティモールにある難民キャンプです。反独立派の民兵とインドネシア軍は、多国籍軍が入ってくる前にインドネシア領に退却していました。しかし、彼らは退却に先立って 25 万もの東ティモール人を西ティモールに連行していました。この人たちは敗けた勢力の人質となっていたのです。インドネシア領に多国籍軍は介入できません。国際社会の目がとどかないその場所で、独立派の女性に対する報復的レイプが繰り返されていたのです。西ティモールの難民キャンプに関する日本政府の認識はずれていました。日本政府は難民キャンプを安全な場所と考え、西ティモールまで救援物資を送ることに腐心しました。しかし、緊急に必要なだったのは、難民キャンプを牛耳る武装勢力を武装解除させ、解体し、難民の人たちに帰還の自由を保障することだったのです。難民の帰還が遅れば遅れるだけ、暴力の被害者は増えていったのです。

人道の危機に際して人びとの安全を守るには国際社会の関与は不可欠です。しかし、そこには国益に左右されない介入の原則が必要だと思います。特定の大国が自国の国益を優先して介入の有無を決めるような今までのやり方を続けるかぎり、どこの紛争も收拾はつかないでしょう。重要なことは、人権の危機を指標に、国際社会が原則的かつ継続的に関与することだと思います。

佐藤

古沢さん、ありがとうございます。実際のご苦労を、現場での体験に基づかれた内容ですが、一面、その国連、あるいは日本を含む先進国が抱える問題ですね。こういう東ティモールという小さな国の人権問題というものについて、国連のある意味の官僚主義的な面なり、あるいは先進国のそれぞれの政治的な思惑、特に軍需産業なり、あるいは国益ということが優先されて、そういったしわ寄せがこういう悲劇を増幅させてしまったと。特に日本の援助が見当違いであったという点は、非常に重く受け止めなければならないのではないかと思います。

それでは、お待ちどうさまでした。アイリーン・サンチャゴさんですが、ミンダナオの女性委員会の委員長をやっておられて、国連の世界女性会議、NGOフォーラムの事務局長もやっておられた方です。

ミンダナオはご存じのように、イスラム系の住民等の関係で紛争が現在でも続いているという話でもあります。私自身、先ほど自由人権協会で活動していたということをお申し上げしましたが、当時、人権派弁護士ということで、マルコス政権下のフィリピンに、“Fact-Finding Mission”ということで実際の人権侵害の状況調査に行ったことがございました。これはもう 20 年以上前の話ですが、そのとき、やはりダバオというミンダナオのまちで私が会う約束をしていた弁護士さんが、道でジャーナリストと歩いているところを狙撃されて暗殺されてしまったとか、まさに息子を殺された人から話を聞いたりとかしまして、このマルコス政権下にいかにひどい人権侵害があっ

たかということを理解したわけです。その背後に、残念ながら日本のODAが絡むいろいろな汚職の問題というものが見えてきまして、ある種、日本のODAがフィリピンを含めたアジアにおける人権問題を増幅ないし、支援しているようなそういうふうな問題意識を持ってフィリピンの人権侵害への関心を持ったというような経緯もあります。そういう意味で、今回、サンチャゴさんからお話を聞くのは、私個人としても非常にうれしく思います。

アイリーンさん、よろしくお願ひいたします。

## 人間の安全保障と紛争予防、紛争管理と平和の構築 アイリーン・M・サンチャゴ

皆さんこんにちは。会議にお招きいただきありがとうございます。講演の題目は、今の時代に恐らく最も重要な関心の1つだと思います。人間の安全保障と紛争予防、紛争管理と平和の構築です。佐藤先生、喜多先生、古沢先生と共にこのパネルに参加できることを非常に名誉なことだと感じています。

講演を始める前に、少し時間をいただいて、私の経歴について少し述べたいと思います。1973年、皆さんの中にはまだこの世に生まれていない人もいたでしょうが、その年に私はすでに女性問題について活動を開始し、貧しい社会での貧しいイスラムの女性たちを組織化しました。その後、国連で10年間働きました。国連女性基金（UNIFEM）のアジア太平洋地域の会長を務めました。皆さんすでにご指摘のように、1995年に中国で行われた大規模な会議の事務局長も務めました。1996年フィリピンに帰国し、中国での会議で本当に疲れ果てていたために3年間は何もせずに暮らしました。それから1998年、国の副大統領を目指しました。官庁を運営するのは初めてで、すばらしい経験でした。平和と紛争の問題にも関わりました。なぜなら2001年に、モロイスラム解放戦線（ MILF ）と交渉中だった政府平和交渉委員会の女性2名のうち1人に指名されたからです。つまり平和の交渉人になった訳です。2001年には、キリスト教徒、イスラム教徒および原住民女性がミンダナオ島で平和と貧困問題について共に働くためにミンダナオ女性委員会を組織しました。

エリーズ・ボールディングは私の一番好きな社会学者の1人です。「平和の文化：歴史の隠された側面」という著書があります。征服戦争は常に歴史上重要な出来事として記録されている、と書かれています。しかし歴史には隠された側面があります。すなわち、平和を構築し、維持するという仕事です。しかしいまだかつて平和について書かれることはありませんでした。

彼女は子供たちに平和の行動を教えることを始めとして、平和な社会の構築と維持について女性たちがどのように重要な役割を担ってきたのかという事例を示しています。注目に値する事例はたくさんあります。インドでは、木を伐採して食物、薬、生活の糧を得るのを阻止するために女性たちが木に抱きついたチプロ森林保護運動がありました。核軍縮のための女性運動、イギリスのグリーンナムコモンの女性たち、ケニアのグリーンベルト運動などもありました。グリーンベルト運動の創始者ワンガ

リ・マータイは最近ノーベル平和賞を受賞しました。

実際、女性は、平和を好むという伝統を持ち続けています。ボールディングは、「平和を好むことは、全ての人々の幸福を維持するため、常に変化し続ける生命世界において、理解、状況および行動を常に形成し、また再形成することを必要とする行動概念である。」と述べています。

こうして見ると女性は衝突の防止、衝突の管理および平和の構築において決定的に重要な役割を担っています。必要があれば実施し、促進し、育み、立法化する必要のある「生活様式、信条の様式、価値観、行動および付随する制度的取り決め」とは何を指しているのでしょうか？

フィリピン南方にあるミンダナオ島での仕事の中で、私たちは外見上異なる価値観や行動だけでなく歴史上の矛盾する解釈にも直面しています。ご存知のように、フィリピンは16世紀の間スペインの植民地でした。どの点から見ても今日の国家に相当する、当時屈強の2つのサルタンがありました。スルとマギンダナオのサルタンは、当時から既に中国およびオランダと交易し、非常に効果的に領土を統治していました。スペインの植民地者は、モロ民族という、イスラム教に改宗し強烈に独立を叫ぶ人々の激しい抵抗にあいました。抵抗は今日も続いています。モロ民族は、自分たちはフィリピン共和国の一部ではないのだと宣言しています。いわゆるフィリピン諸島をスペインからアメリカに譲渡する協定の一環として、彼等は自分たちの領地が併合されることを承認しなかったからです。

ミンダナオ島では今日もモロイスラム解放戦線（MILF）が、数百年間にわたって祖先が行ってきた紛争を遂行し続けています。ミンダナオ島の人々だけでなくフィリピン全土の人々はその政治的暴力に影響を受けています。

私たちの中で紛争の近くにいる者は、ミンダナオ問題の複雑な解決法を目の当たりにしています。マルコス独裁政権の基盤であった国家安全体制は、今でも残っています。スペインとアメリカの植民地主義は、かつてマルコス国家安全体制によって覆されましたが、現在は世界的テロリズムの脅威に圧倒されています。これらの様々な圧制者は「国の利益」と華々しく呼ばれる大義を実施する者として暴力を使用しているのです。これは国家の安全を得る手段として軍事主義を拡大したに過ぎません。緒方貞子博士とアマルティア・セン博士が代表を務める人間の安全保障委員会の報告書は、大変意義のある報告書です。人間の安全保障こそが、私たちに必要なのです。

先に述べたように、平和を好むということは、全ての人々の幸福を維持するために常に変化し続ける生命世界において理解、状況、行動を常に形成し、また再形成することに関わる行動概念です。では、私たちは今住むこの世界をどのように理解し、そして理解しなおすのでしょうか？

冷戦終結の結果、アイデンティティと多様性の問題が前面に出てきました。この問題に関する適切な行動を生み出すためには、私たちは、マイノリティゼーション・プロセス、すなわちグループが社会の政治的、経済的、社会的な生活から周辺に追いやら

れるプロセスを理解しなければなりません。ミンダナオ島ではモロ族は少数民族と呼ばれることを望みません。彼等は、自分たちは少数民族にされたのだと主張しています。実際、言葉の使い方は問題の核心を理解する上で重大です。確かに、仮にモロ族が少数民族にされたとするならば、それは主にモロ族の信条が原因です。社会は暴力なしで機能すべきだとすれば、どうすることが必要なのでしょうか？

まず重要なことは、偏見プロセスがどのようにもたらされるのかを理解することです。このプロセスは固定観念化から始まります。例えば、全ての日本人は、もしくは全ての黒人は、もしくは全てのゲイは、もしくは全ての女性は、こんな風なんだと言います。そうして中傷し、侮辱します。どんな風に侮辱するかご存知ですね。黒人だからこうなんだ、と。こうして固定観念化から始まり、侮辱し、次に偏見の態度に移行します。集団全体に対して實際上完全に偏った見方をするようになります。次の段階が差別です。例えばある特徴を持つように見える人々は職場で差別されることがあります。今日の政策あるいは実行において差別されています。差別は暴力へと続きます。固定観念化から侮辱し、偏見そして差別へと移行し、最後に暴力に至る偏見プロセスの推移を理解していれば、どこで止めるべきなのかは明らかです。固定観念化を始めた時、開始時点で止めるべきなのです。

イスラム教徒の友人が、イスラム教徒が敵視される社会の中で、イスラム教徒でいることはどういう意味を持つのかを私に語りました。彼女たちはイスラム教徒という理由で仕事を見つける際につらい目にあいました。求人票上で宗教を変えて仕事を得ました。空港では侮辱的で細かい検査を体験しています。タクシーはイスラム教徒である女性の友人たちの前には止まりません。彼女たちがヘッドスカーフを身につけているからですが、このような例は数え上げればきりがありません。

これは個人レベルのことです。政治レベルでは、差別は政策立案者の目に入らないのか、もしくは政策立案者はそれを当然のことだとしています。職務上の怠慢が蔓延し、人口の大半をイスラム教徒が占める地域では、深刻で広範な貧困を生み出しています。フィリピン全体の79行政区のうち、最も貧しい5つの行政区はすべてイスラム教地域です。子供の死亡率は最高、識字率は最低で、飢饉が最も広い範囲で発生し、一病院あたりの医師数は最少という状態です。この政治レベルの職務怠慢は今日だけではなく、何百年も続いているのです。

女性がこれらの複雑な問題に向かい合う際に、どう対応すればいいのでしょうか？ 私たちは、信頼と相互利益という性質が衝突時にはひどく消耗されることを知り、そしてそれを感じています。社会資本を構築するためには、断固たる努力が必要です。では社会資本とは何でしょうか？ 社会資本とは、人々が共通目標を達成するために一緒に働くことができる誠意と信頼の積み重ねです。私たちに誠意と信頼がなければ社会は暴力に傾きます。物理的、経済的、生活基盤や人的資本だけでは十分ではありません。社会資本を構築する必要があるのです。プロセスとしての平和とは、平和について考察するダイナミックな方法です。多くのレベルで起こり、多くの役者が様々な戦略や手法を用いて行う方法です。

昨年のミンダナオ島における別の軍事攻撃によって80万人が家を失いました。

様々な民族、信仰、年齢および地域集団からなるミンダナオの女性たちが多くのレベルで協力することを決定しました。「平和を望む母親たちのキャンペーン」をミンダナオ島の平和を求める国家キャンペーンとして開始しました。ルソン島およびビサヤ諸島に住む母親に会い、私たちの平和を切望する気持ちは彼女たちの気持ちでもあるはずだということを理解してもらいました。

私たちは、各地を回って女性たちの話を国民の皆さんに伝えることを開始しました。戦争とは、無意味な暴力で夫、兄弟姉妹、息子、娘を失うことを意味するのだということのを他の母親たちに理解してもらえるように努めました。

私たちは国のメディアの協力を得て、広く国の聴衆に訴えることができました。政府と MILF が停戦を宣言するには国の世論に影響を与える必要があることがわかっていました。資金はなくても、多くのグループと協力して何とかテレビ、ラジオ番組で意見を述べ、有力紙にいくつかの広告を出しました。今度はそのキャンペーン用に制作した45秒間のテレビコマーシャルをお見せします。

(Mothers for Peace のテレビコマーシャルを流す)

メッセージはお分かりいただけましたか？ これが私たちの制作した45秒のテレビコマーシャルです。ご覧いただいたように、私たちは、メッセージは頭ではなく心に訴えることにしました。戦争時には人類が殺されることを人々に理解してもらったのです。このテレビコマーシャルから2ヶ月後に停戦となりました。政府と MILF が停戦を宣言したのです。今日は、キャンペーン中に私たちが使用したスカーフを数枚持ってきました。お母さんだけにスカーフを差し上げます。たくさんいますね。何人ですか？ お母さんたちはスカーフを受け取ってください。後ほど差し上げます。

国の他の地域で多数の母親と会合をした際に分かったことがありました。紛争を中止し、紛争がこれ以上起こるのを防ぐためには、癒しと和解を生み出すことが重要だということです。

ミンダナオ島出身の3人の母親が自分たちの苦しみについて話すのを聴くために、千人もの女性が集まって1つのホールが満杯になっている様子は、特に心を打たれる光景でした。そこには怒りも、罪のなすりあいもありませでした。戦争によって家を失った痛み、絶えず差別された痛み、貧乏である痛み、戦争によるひどい不安による痛みだけがそこにありました。

それらの講演が終わると、聴衆の中から女性の集団が演台に駆け寄り、彼女たちを抱きしめました。目に涙を浮かべてこう話かけていました「どうか許してください。あなたたちを傷つけていたことを知らなくて。」それを聞いた時、私たちが和解プロセスに近づいたことが分かりました。改悛の情は和解の最初のステップだからです。

母親たちが他の母親たちに手を差し伸べる力を感しました。「平和を願う母親たちのキャンペーン」を「平和を願う母親たちの運動」に変更する決定をしました。私たちの行動を政治的、経済的そして文化的に平和に向けて確実に結束させるためです。



フィリピン政府と MILF は今、正式な和平交渉の再開について話し合いを行っています。ラマダン明けに再開されることを願っています。性差別の問題が紛争後の再建および復興で真剣にかつ確実に考慮されるよう、12月9日 - 10日に、和平委員会、政策立案者および援助資金提供者を招待する会議を企画しています。そこで紛争後のこの時期に最優先する性差別の問題を話し合います。カンボジア、アフガニスタン、ティモール島民、ソロモン諸島およびスリランカからゲストスピーカーを招待して、彼女たちの経験から学ぶために語ってもらいます。

女性差別や社会的疎外や貧困の女性化など過去の問題を再発悪化させることを避けるため、和平、再建および復興の遂行は、男女平等と共に進める必要があることを強く主張してゆきます。

加えて、多文化主義を国の政策とするキャンペーンを始めます。これは UNDP の 2004 年人間開発報告が「この多様な世界で文化の自由を」という題であることと無関係ではありません。みなさんもこの報告書を1部入手するよう強くお勧めします。多文化主義の問題は今日の世界において私たちの関心を集めています。多様性を衝突や暴力の源ではなく、生産性と幸福の源にするにはどうすればいいのでしょうか？

報告書では多様性、発展および政治的安定に関して世間一般が抱いている神話に対する回答を次のように挙げています。

- 国々は、国の結束と文化的多様性の中で選択を行う必要はない。
- 経験的な証拠が示すところでは、文化的相違や価値観の衝突が暴力的衝突の根本原因であることは稀である。
- 文化的自由とは、保全自体を目的として伝統への盲目的忠誠をもって価値観や慣行を保全することを意味するのではなく、個人の選択を拡大することを意味する。
- 文化的多様性が発展を遅らせるという証拠はない。
- 文化的進歩または文化的民主主義と経済的進歩または経済的民主主義の間に関係があるという証拠はない。

人間開発報告書は、若者、老人、フィリピン人、日本人、イスラム教徒、カトリック教徒、原住民、専門家、労働者、男性、女性など、人々を分類する箱について取り上げています。

女性は、分類されるということがどういうことか知っています。女性は弱く補助的で、元来、家を守るように生まれたのだとよく言われますが、しばしば影の実力者とも呼ばれています。

実際は、女性だけではありません。全ての人には1つあるいは複数の箱に属しています。皆、複数のアイデンティティを持っているからです。エリーズ・ボールディングはこう言っています。「自然は1つとして同じものを2つ作らない。」多様性は紛れもない事実なのです。

従ってこの社会でアイデンティティを管理することは平和の鍵であり、さらには繁栄の鍵です。社会が多様なアイデンティティを管理しなければ、衝突や暴力が生じるかもしれません。そして平和なくして経済的な成長は困難です。

2年前オーストラリア政府の援助でオーストラリアを訪れた際、多様性を管理する国家政策について学びました。多文化主義と呼ばれています。当時私には多文化主義こそミンダナオ島だけでなく、国の残りの地域で長く続いている問題の鍵を握るように思えました。偏見はミンダナオ島だけの問題ではなく国全体の問題だからです。多文化主義は、平和と繁栄のためにこれらの様々なアイデンティティを管理する方法として魅力的な概念だと思えました。

すでに指摘したように、フィリピン政府と MILF は、7年間、3 政権を通して和平合意交渉を続けています。和平合意は、すぐに得られることを望んでいますが、戦争の銃を沈黙させることはできても、偏見の銃を沈黙させることはできないでしょう。偏見と差別が続くのであれば、真の永続する平和を私たちは決して知ることはできません。

ミンダナオ島そして実のところ、国全体が平和を体験するとすれば、私たちが多文化主義者になることは避けられません。付け加えるならば、日本社会も多文化主義になるべきです。日本には昔よりもずっと多くの外国人が入ってきているからです。多様性を長所として利用すれば、実際に平和のみならず繁栄をもたらすでしょう。私たちの長所である多様で多数の文化、生活様式、才能および能力を高く評価することでしよう。

政策および実践としての多文化主義は個人と集団に安全を提供するでしょう。人々は、全員の幸福のために様々な複数のアイデンティティを実現しているからです。

多文化主義に関する活動と同時に、私たちはまた、社会の分裂を乗り越える連携と、独立した裁判所制度や独立したメディア、敏感な民主主義等、衝突管理の制度が豊富になるようにするために働かなければなりません。



「平和を願う母親たち運動」が様々なレベルで女性ネットワークと平和グループと結びつく女性の草の根運動として効果的な提唱を行うこと、独立した司法、独立メディアを確実に手にすること、影響力の強い数人のためではなく全ての女性の利益となる民主主義運動を行うことを思い描いています。

後でこの会議の決議の草案作りが始まります。皆さんのお考えを仰ぎたいと思います。以下の質問について皆さん自身が約束できることを詳しく述べてください。

- 1 . 個人レベルにおいて一個人として何を行いますか？
- 2 . 今日の世界で何が起きているのかを知り、前にすでに数人の演者が話されてまだ実行されていない様々な宣言や条約について知った今、組織の一員として何を行いますか？ あなた方の所属する組織には何ができるでしょうか？
- 3 . この世界で最も影響力を持つ国家の1つである日本国民のレベルで、何を行うことを約束できますか？

つまり私の質問は、一個人、一組織の一員および一市民として、平和のためにあなた方は何ができますか？ という問いです。

平和の文化主義を歴史の隠された側面のままにせず、目に見える側面とするために、私たちは自分たちの行動を目に見えるようにすることが必要です。

佐藤

サンチャゴさん、どうもありがとうございました。非常に理論的にも優れたお話だったと思います。また、実務家としても、実際の紛争に対し、先ほど見せていただいたテレビの宣伝のようなものを作られたということで、その理論面、実践面において非常に素晴らしい活動をしていると思いました。

特に、喜多先生が問いかけた問題にもかかわりますけども、暴力、暴力的な紛争に至る過程として、まず私たちの心の中にある問題、すなわち、ステレオ・タイプの物の見方、固定観念、そういったものが基礎にあって、それが偏見を生み、それが差別につながって、そして暴力に至るんだという点などは、非常に、私たち自身がある種平和をつくっていく、一人ひとりがそういう使命があるということ、逆に思い知らされたという思いがいたしました。

ということで、多少時間が押し詰まっていますが、せっかくの機会ですので、パネリストの方々同士で意見を出し合うなり、質問、あるいは時間の制約でお話できなかった点、補足ということも含めても構いません。一応、先ほどの順番で、では、喜多先生の方からよろしければ、二人のパネリストに対し、あるいはご自分の何か、もう一度リプレイズすることありましたらよろしく願いいたします。

喜多

サンチャゴさんに、あとでお答えいただいても構いませんが、少しお尋ねをしたいと思います。サンチャゴさんは、ミンダナオでイスラム、ムスリムの女性の仕事をしておられました。私はパキスタンでアフガン難民の仕事を2年間したのですが、紛争と宗教の色分け、特に最近のテロとイスラムという問題、何かこう過大に取り上げられすぎているような気もいたします。私自身、イスラムの社会で2年間暮らしたときに、それはそれで毎日の生活の中にそれほど暴力的なことが蔓延しているわけでもないという点で、宗教と暴力の文化ということについてどのようなお考えをお持ちか、あとで答えていただいても構いません。

佐藤

ありがとうございます。ではあとでお答えいただくということで、ほかに何かコメントとか、先生の方からありますか。

喜多

はい。古沢さんの方には、私も現場で働いているときには、そういう外部の膨大な力と言いますか、大きなドナーの横暴さに憤りを感じました。そのようなことに関して、やはり私たちが自分の国である日本に対しても、もう少し意見を言わなければいけないのではないかなという感情を持ちながら、なかなかそういう力がまとまってフィードバックされていないように思います。そのあたりについて、またあとでコメントしていただければありがたいと思います。以上です。

佐藤

ありがとうございます。それでは、取りあえず出してもらって、また、多分休憩を挟んだ方がよろしいと思いますので、ご準備いただくということで、では古沢さんの方からいかがでしょうか。

古沢

コメントというよりは補足です。サンチャゴさんがおっしゃられた女性たちの働きにも関連してくることで。私がさまざまな紛争地で活動する女性たちから学んだことは、女性たちには、ある一定の安全が守られた空間があれば、宗教の違いや国の違いを超えて連帯できる可能性があるということです。東ティモール問題に関して、インドネシアの女性活動家と東ティモールの女性活動家は、いろいろな場面で協力してきました。例えば国連の女性に対する暴力の特別報告者であるクマラスワミさんが初めて東ティモールに入るときには、海外の連帯グループ、インドネシアの女性団体、現地の女性団体が連携して、事前に彼女に会って情報を提供し、クマラスワミさんが現地で性的暴力の被害を受けた女性と会えるようにアレンジしました。こういうことはできるのです。ただ、どうしてもできないこともあるのです。

先ほどサンチャゴさんは「停戦」によって何が可能になったのかおしえて下さいました。一方、軍事的な衝突や武力による弾圧が横行している場合には、丸腰の女性たちができることは限られてしまいます。また、交渉を始めたり合意を取り付けたりするには国際的あとおしが必要な場合もあります。とくに、インドネシアと東ティモールのように力関係が偏っている場合は、国際的な介入がなければ交渉による平和的解決はありえません。東ティモールに関して大きな矛盾を感じたのは、東ティモールの抵抗勢力側が外国からの軍事援助を受けず、また無差別テロを抑制してきたことで、かえって世界の注目を浴びなくなったことです。外国の軍事援助によって派手な攻勢に出るとか、インドネシアの都市で自爆攻撃を繰り返すとか、そういった行動を取らないことは国際的なパワーゲームの中ではポイントにならないのです。女性たちは、動くノウハウも持っているし、意志もある。しかし、女性たちが動くには、彼女たち

の安全をまもる一定の民主的な空間が必要です。その空間を確保すること、そのための協力が国際社会には求められていると思います。

このところ、紛争後の復興支援に国際協力が集中している感じがします。しかし、一度壊れたものをもとに戻すのはものすごく大変なことです。傷ついた人たちもすでに出てしまっています。どう直すかの議論も重要ですが、どうしたら壊すことにまっただがかけられるのか、もう一度、予防や交渉の段階への関与を見直すということも必要なのではないかと思いました。

佐藤

はい。どうもありがとうございました。それでは、サンチャゴさんの方、いかがでしょうか。何かほかのパネリストに質問、あるいはコメント、ありましたらどうぞ。

サンチャゴ

答えていいでしょうか？ イスラム教、宗教の問題は大変重要です。宗教は理由とされるべきでないときに、理由として使用されるからです。例えば本当はミンダナオ島で人々がムスリム・クリスチャン国と呼ぶのを止めさせたいと願っています。そうではないからです。そのために私たちは今歴史に立ち返っています。歴史を理解せずに今起きていることだけを見れば、その場所をムスリム・クリスチャンと呼ぶかもしれません。しかし通常それは権力を意味しています。マージナリゼーション、マイノリティゼーション、植民地主義と抵抗について私が話したことを思い出してください。それは権力なのです。

今日の世界で、自分の行動の基盤として宗教を利用する人々は、幾つかのことについて自分の無力さを感じていると思います。そのため、彼等は裏で人々を駆り立てる何かを必要としています。宗教は大変感情的な基盤であり、行動に対する大変感情的な動機です。したがって、私たちも宗教のせいにするだけで火に油を注ぐことが無いように慎重に行動する必要があると考えます。なぜならほとんどの場合、それは宗教のせいではないからです。宗教は人々を集めて感情的な行動に走らせるために利用されているだけです。しかし通常それは権力の問題であり、資源の問題なのです。ほら、なぜブッシュはイラクに侵攻したのでしょうか？ 他に理由など何もありません。それはイラクの資源を狙ったためなのです。

したがって、私たちは、宗教が悪い、イスラム教が悪い、と話を簡単に済ませ過ぎないようにする必要があります。イスラム教は平和についての宗教です。平和的な宗教なのです。サラーム。そのように利用する宗教は、偉大な貢献であると思います。宗教があらゆる類の暴力行動の根拠として利用されないように確認し、宗教的理由で暴力行動が繰り返されるのを防止しなければいけません。

古沢先生の紛争後にすべきことに関する討論に次のことを付け加えたいと思います。紛争後の国の再建中に女性が集中すべき領域は普通3つあります。

まず1つ目は、女性の政治的な参加を要求することです。闘いの中で大変活躍した女性たちを、一旦平和が来ると家庭に戻ることが何度も行われています。あたかも、彼女たちは闘いに立ち上がったから台所に戻れといわんばかりです。和平合意が署名された後も女性が政策決定の場に立ち会うことを確認する必要があります。政治的な参加を要求することが重要です。

2つ目は、和平合意の署名後に女性が必要とする資源へのアクセスはどうなるのでしょうか？ 私がこのことを指摘するのは、和平合意を得たフィリピンでは、再建のための何億というお金が国の指揮官を通過しているからです。指揮官は全て男性です。彼等は家々を建てますがお金はどう処理されているのでしょうか。彼等の家族たちを生き延びさせたのは女性たちです。私たちはその点を再考する必要があると思います。

最後に女性が大変慎重で批判的なパートナーとして必要な領域は、癒しと復興においてでしょう。これが3つの領域です。政治的な参加を要求すること、資源にアクセスし管理すること、そして癒しと復興を行うことです。

佐藤

それから、サンチャゴさんの先ほどの報告で、最後にフロアの皆様方への恐らく問いかけというか、参加を求めたということで、3つほど、宿題を出していただいていますね。すなわち、この分科会終わって、あるいは全体の会議も終わって、この企画が終わった段階で、皆さん方、参加された方は、個人のレベルで一体何ができるか、何をしようと思われるかということを考えていただきたいという点。それから2つ目は、それぞれ皆さん、いろんな組織、一番小さな組織としては家族、職場、あるいは学校、いろんな組織、あるいはNGOもありますが、そういった組織の一員として、何ができるか、何をすべきか。そして3つ目に、日本人の方、特に日本政府、非常に外部者としては力のある、ある種そういった立場にある私たちですので、我々日本人として、日本政府に対して何を求めていけるのかという、この3つですか。これから休憩時間を挟んで、質問等コメントをいただければと思います。

ということで、一応あと、だいぶ時間が過ぎておりますが、10分ほど休憩しまして、3時20分から再開して、皆さんと質疑応答・議論をしていきたいと思っております。では、どうもよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

(休憩)

佐藤

それでは、第1分科会を再開したいと思います。休憩時間の間、たくさんの質問票をいただきました。ありがとうございます。それで、時間もないので、一応3つの論点に絞ってみようかなと思います。

1つは、平和とは何か。ごく素朴な疑問ですが、この点、特に喜多先生の方から心の問題という指摘がありました。特にお医者さんという立場からの議論でもあったの

ですが、我々が考えている平和とは何なんだろう。日本はとても平和だというふうなコメントもありますが、果たしてそうなんだろう。平和というものはどういうものなのかということ、改めて少し考えてみたいということが1点目。

それから、そういう武力紛争などがあつた地域を復興していく上で、あるいはまだ紛争がくすぶっているような社会に対して、外部者として国連、あるいは日本というものがどういうことができるか、していくべきか。これは先ほどのサンチャゴさんの問いかけにもなるわけですが、古沢さんの方からのいろいろなご指摘もありました。

それから、3つ目。時間があれば、ですけども。個別に、我々が具体的に、では何をすべきなんだろうということ。サンチャゴさんが指摘された第1点目になるわけですが、特に先ほど母親のアクションということで、母親というある種一つのグループというものが指摘されたわけですが、こういったことについては皆さんどのようにお考えになるか。今は、むしろ母親にならない権利ということも言われるぐらいの時代ですし、日本でむしろ少子化ということが言われている。その原因いろいろあるわけですが、ある種男性社会であつて、私を含めた男の責任だと私も妻によく怒られておるんですけども、そういうことも含めて、身近な問題として皆さん方の日常生活を含めて、そういう母親としての活動をする、あるいは母親でなくても活動する。もちろんのことですが、そういったことを含めた問題。この辺で議論をまとめていければと思います。

それでは、初めに平和とは何かという問いかけです。これは、喜多先生の話の中で、UNESCO憲章を引用されて、心の砦をつくるということ、つまり心から戦争は発するということですね。この点、具体的に何か喜多先生のご見解として、こういった心の問題、先ほどのサンチャゴさんのお話の中で出てきた、いわゆる既成概念とか固定観念といったものが基礎にあるのではないかというようなご指摘で、我々の心の中にある種排他的な、そういう偏見というものこそがやはり非難されるべきではないかというご指摘ですけども、いかがでしょうか。

喜多

はい。私は先ほど申しましたように、子供の時代に第二次世界大戦を経験しています。田舎に住んでいましたので、それほど空腹という経験はありませんけれども、周りの大人の行動を見ていると、何かその、ある種の異様さを、本当に幼時体験ですけども感じていたように思います。

最初に私が紛争地を見たのはアフガニスタンですけども、以後アフリカ、中央アジア、中近東の紛争地をたくさん経験して思ったことです。平和というのは、お金があることではない。人々が、人々はと大げさに言わなくても「自分が」でいいんですけども、将来に対する希望というか、展望を持てる、そして学校に行きたいと思ったら学校に行ける、ある仕事に就きたいと思ったらその仕事に就く。それはトレーニングが必要かも分かりませんが、そういうその希望、展望と選択の幅、チョイスの幅がある、そういう生活を送れる状態が私は平和ではないかと思っています。取りあえず。

佐藤

ありがとうございます。今の点に関しまして、マツイエユカコさんとおっしゃるのでしょうか。いらっしゃいますか。喜多先生への質問ということで、先ほどの発表の中で、「建物だけではコミュニティができるものではないということでしたが、実際の再生には何が必要か」、「何をもって人間として生きているということができると思われますか」ということで、今の点に関連するものですから、この点の回答をいただけますでしょうか。

喜多

はい。私はいくつかの国の“Post-conflict”、いわゆる紛争後という時期のお手伝いもいたしました。そこで思うことは、もちろん、私、難民援助が最初だったので。水、食べ物、シオルター、それから保健医療ということはよく言われます。これは人が生きていくための基本的な条件だと思います。それに加えて言うことは、やはり人が働く場所。自分の意思で動ける、先ほど申しましたような選択の幅と将来に対する展望を持てるそういう社会を、コミュニティをつくっていくこと。それを何とかしなければいけないと思います。

緊急援助の場合には、いつも医師や看護師が現場に出掛けて、相手の国の人々を助けるという、どちらかと言えば、行く方から言えば能動的な、来てもらう方から言えば受動的な活動が行われますけれども、人々が自分で何ができるのかということを見て、そのできることを助けるという方向に変更していくべきではないかと思います。紛争の被災者、自然災害の被災者を、全て十把ひとからげにかわいそうな人だからという見方だけでは復興はできないと思っています。以上です。

佐藤

ありがとうございます。要するに、希望を持てるかどうかということだと思います。私、6月にスリランカの方に行ってまいりまして、スリランカも今、停戦合意が成立しているのですが、いわゆる自爆テロというのがございます。その多くは寡婦、要するに家族を失った女性であったりとか、あるいは少年少女のような人が爆弾を抱えて自爆するというふうな話を聞きました。その理由というのは、やはり生きていくことに対する全くの希望がないということで、ある種のそういう政治的に利用されてしまうということのようです。そういう意味で、希望を持ってない被害者がいる社会ということが、ある種の暴力につながるという、その悪循環といったものも感じてきました。はい、どうぞ、古沢さんの方から一言。はい。

古沢

喜多さんのおっしゃられたことは、本当にそうだと思うのですが、一つだけ付け加えさせてください。私が今いわゆる狭義の平和構築の段階にある東ティモールを見ていて思うことは、国際援助が逆に人びとの間の平和や安寧を壊してしまうこともあるのではないかということです。例えば、公平性の問題です。例えば、ある地域では何億もかけて灌漑施設が復旧されたのに、こちらの地域では井戸ひとつ直らない、とい



うような格差が生じると、不公平感が生まれます。援助する側の事情が先行し、公平性の原則が軽んじられると、援助は、人々のやる気をそぐとともに、人々の和を乱す元凶にもなります。援助の原則は、喜多さんがおっしゃるように、その国や人々がやろうとしていることを、いかに助けるかということだと思います。

佐藤

ありがとうございます。今の論点、平和とは何かということについて、サンチャゴさんの方から何かありますか。

サンチャゴ

この数ヶ月に読んだ文献で私が最も注目したのは、人間の安全保障委員会の報告書です。すでに話したようにこの委員会は緒方博士とセン博士が共同議長を務めています。素晴らしい文書ですので、みなさんも是非1部入手してください。

私がこの報告書に書かれているよりもうまく説明できるとは思いませんので、報告書の内容をいくつか読みたいと思います。こう書かれています。「安全保障の焦点は、国家から人々の安全保障へ、すなわち人間の安全保障へと広げなければならない。」これまでは、常に国家の安全保障が問題にされてきました。今は人間の安全保障に注目することが必要です。「人間の安全保障とは、人間の中枢にある自由を守ることである。人間自身に内在する強さと希望に拠って立ち、死活的かつ広範な脅威から人々を守ることを意味する。人間の安全保障とは、人々の生存、生活および尊厳を確保するための基本的な条件を人々が得られるようなシステムを構築することでもある。さらに、人間の安全保障は、欠乏からの自由、恐怖からの自由、あるいは自身のために行動する自由といった様々な自由を結びつける」

この内容は、皆さんが耳にしたことの回答に結びつくと思います。ここにいる私の2人の同僚である喜多先生、古沢先生が言っていました。尊厳の感覚、脅かされてないのだという身体的安心感、食べることができるのだという感覚を結びつける必要があります。したがって、欠乏からの自由は重要です。自分の配偶者によるものであれ、隣人によるものであれ恐怖からの自由は重要です。しかし、皆さんが自身のために行動する自由もとても重要です。皆さんは無力な存在ではないのです。

私にとって平和とは何であるのかを考えていました。ただ暴力が無いことを別にすると、尊厳をもって生きることができ、他人を信頼し、他人とともに暮らし協力できることだと思います。私たちが何かをするための可能性を持つことも重要だと考えます。それが理由です。報告書では、私たちが人間の安全保障を成し遂げることを希望する場合の2つの戦略が述べられていました。安全の確保とエンパワーメント。それが2つの戦略です。安全の確保によって人々を危険から守ります。不安定に体系的に対処する規範、プロセスおよび制度の開発には協調努力が必要です。それが安全の確保です。エンパワーメントは人々が自らの可能性を開発することを可能にし、政策決定における完全参加を可能にします。このように安全の確保とエンパワーメントは相互に増強し合う、どちらもほとんどの状況に必要な戦略です。

佐藤先生ありがとうございます。

佐藤

サンチャゴさん、ありがとうございました。非常にいいところなのですが、時間が迫っています。多少なりとも延ばせるのでしょうか。これからいいところなので、続けたいと思います。

恐怖からの自由は、ルーズベルト大統領のいわゆる「4つの自由」の一つのことです。いまだにまだこの世界から消えていないということが問題だと私も思います。特に、やはり恐怖が恐怖を呼ぶという悪循環です。すなわち思うに、人を撃ったり殺したりするというのは、殺したいからやるというより、むしろ自分を守ろうとすることから生じることが多いのではないかと思うわけです。

その観点で、若干日本との関係で述べれば、午前中のセッションで日本は、戦争の被害者という話が出たのですが、実は加害者だということも、やはり再認識する必要があります。特に在日朝鮮人、韓国人などの方に対してのいろんな人権侵害ということ、戦前・戦中・戦後を通じて日本人がやってきたという暗い過去もあるわけです。特に、今回地震でいろいろな災害ありましたけども、ご存じかと思いますが、いわゆる関東大震災の折に、朝鮮人が復しゅうするためにやってくるというようなデマが流れたがために、何の罪もない朝鮮人の方を日本人が虐殺したという歴史があるわけです。これは別に、要するにそういう自分たちがやった、加害者であることの反面、復しゅうを恐れるという恐怖から出てくる話だと思うのです。こういったものがやはり紛争の根っこには、きっかけとしてあるのではないかと。そういう意味で、そのもっと奥にあるのは、恐らくサンチャゴさんが言われた、既成概念のようなある種の偏見というものがあるように思います。

それで、その偏見の問題について2つほど質問が出ていまして、フジタタクミさんとお読みするのでしょうか、はい。フジタさん、いらっしゃいますか。質問は英語で、日本語で言った方がいいかな。すみません、通訳してください。

「アイリーン・サンチャゴさんのステレオ・タイプの中から、差別、貧困、そして暴力へ進展してくという話が印象的でした。今のマスコミやテレビからの情報、テロによってどこで何人亡くなったかなどの表面的な情報の多さなどは、ステレオ・タイプを生む原因ではないかと思ったのですが、いかがでしょうか」という質問。それから、先ほどもご質問いただいたマツイエさんからも、「メディアの利用にはある程度既成の概念の利用が不可避かと思いますが、その際のイメージをステレオ・タイプ化してしまう危険についてどう考えますか。例えば、母親のことを強調されていましたが、こういったことについてもある種同様のステレオ・タイプ化ということになってしまうという可能性はないでしょうか」。

サンチャゴ

確かにメディアの役割は大変重要です。メディアは情報の源だからです。今日の情

報源は基本的にテレビです。聴覚情報だけでなく、視覚情報も持っています。皆さんが見るべきではない特に偏見に満ちた大変悲惨なテレビネットワークがあります。Fox テレビネットワークです。日本に未だ入っていないのであれば説明いたします。この Fox テレビネットワークはアメリカのネットワークで非常に偏見に満ちています。さらに、アメリカだけでなく、世界中で、私自身の国の中でさえも放映されています。その結果、今起こっていることに、ピース・ジャーナリズムの動きがあります。例えばオーストラリアにはピース・ジャーナリズムの専攻課程があります。そこでは、イスラム教テロリストと言う表現は使いません。なぜならばキリスト教テロリストとは決して言わないのですから。ではなぜイスラム教テロリストと言うようになるのでしょうか？ このように形容詞は皆さんの偏見を表しています。私はジャーナリストとしての教育を受けました。教授にこう言われたことがあります。「動詞を使用したければ、どうぞそのまま続けなさい。形容詞を使用したければ許可を求めなさい。」これは形容詞が偏見を示すことを意味しています。ですから形容詞をあまり多用しないように心がけましょう。メディアは間違いなく固定観念を形成する犯人です。

平和を願う母親たちについて、そうです、私たちは母親たちの感情的な訴求力を利用しました。日本での状況はわかりませんが、通常家庭で和平問題について働く人は誰でも左派だと見られます。活動的であれば、あなた方は左翼支持者なのです。そうならば、誰もあなた方の言葉に耳を傾けません。しかし皆さんが母親として何か新しいことを言っても、母親の言葉であれば誰でも受け入れます。他の人々に私たちの言葉を届けることができるように母親たちの感情的な訴求力を利用しました。戦争は人々、人類に悪影響を及ぼすというメッセージを伝えるために、母親たちの訴求力を利用することは1つの方策でした。そして実際に母親たちはそう感じているのです。これは固定観念化だとは思いません。母親たちが平和について行動するための賢明な戦略だと考えています。ありがとうございました。

佐藤

ありがとうございます。マツイエさん、いかがでしょうか。今のお答えに対して、何か、いや、違うんじゃないかとか、あるいはさらに質問とかございますか。

マツイエユカコ

お答えどうもありがとうございました。私、北アイルランドの紛争について、少し勉強したことがありまして、そこでは女性のピースグループみたいのがあったのです。それに対する大きな勢力として、同じく女性の反対運動みたいのがありまして、その中心になっていたのはやはり母親というふうに呼ばれる女性で、現在はアメリカの状況を見ても、いわゆるコンサバティブの女性の権利を守るグループというのは大体母親だからとかという主張がされると思うのです。やはりそういう点を考慮しながら、女性、mother、という呼称をクレイムにするには非常にいい手段だと思うのですが、同時に危険性を踏まえる必要があるのではないかなと。特に最近のバックラッシュを見ていると思うところです。どうもありがとうございました。

佐藤

ありがとうございました。そうですね、私もどう転んでも母親にはなれないわけですが、むしろ父親として、父親のグループとかオーガナイズしたいなというそんな気もあります。ある種、私も一緒に子育てやっているのですが、どうしてNHKは「おかあさんといっしょ」というのはあって、お父さんが出てこないのかなと思うのです。

ある種、女性のそういう子育て能力とかそういうことから、平和へのアピールができるというふうなことは、恐らくその通りだと思うのです。それが、いや、男性はむしろそれはアグレッシブで、要するに男性というのはそういう性ではないということで、逆に社会の固定化というか、つまり男は外で働いて企業戦士でいいんだみたいなふうに解釈されてしまうと困りますよね。そういう意味では、男としてもそういう能力もあるのだと、子育て能力もあるんだと、そういうことからやはり証明していくことが、恐らく我々個人としてのレベルでできることなのかなというふうな気がします。どうぞ、はい。

古沢

紛争後の社会に共通する問題として、ドメスティックバイオレンスがあります。その原因のひとつは、紛争を通じて「力で決着をつける」という行動様式が人々に拡がることかもしれません。暴力的行為によるストレスは他人への暴力に転化するようです。戦争は終わったのに女の人たちが平和に暮らせないという事態が発生しています。この問題はきちんと取り組まなければなりません。東ティモールでは「DVに反対する男性の会」という組織があります。この会の活動はボランティアで支えられているのですが、すでに3年も活動が続いています。この会は、NGOや国連のスタッフとして表では立派な仕事をしているのに、家に帰ると奥さんに暴力を振るってしまうという人たちと、友達がそういう問題を抱えているという人たちが集まってうちあけ話を始めたことが出発点です。どうして自分は暴力をふるってしまうのか、他の人はどうだろうかと、小グループで話しあうそうです。自分たちの問題を見つめるところから始まった活動は、今では、村に出かけて行って村の男の人たちとDVや女性差別の問題について討論を行なうプログラムに発展しています。そういった男性たちの活動は女性たちの運動を力づけています。今、東ティモールでは、反DV法の政府案の策定が最終段階に入っていますが、このような人々の活動は政府内の法案推進派の助けとなっています。

佐藤

ありがとうございます。それとの関係で、また2番目の論点で我々として何ができるかということも含めまして、ナワタさんから質問がきています。男性の方のようですが、ご自分で質問していただけますか。多分、喜多先生あての質問だと思いますが、「戦争前の平和を取り戻すために、どうしたらいいのか」というようなことのようにです。

喜多

その、以前の平和を取り戻すためというのは、以前に平和があったという前提なんですけれども、何ができるかというのはなかなか難しいと思うのです。私はまず、平和というものは、なくなって初めて気が付くものではないかなという気がするんですね。ということは、平和を失わないために、本当は相当に努力しないとイケないものがあると思うんです。その努力は何なのかと言ったときに、やはり実際、紛争地近傍でことが起こるときというのは、2、3日の間に急激にまちの治安が悪くなったり、サボタージュが起こったり、お店が襲撃されたりという、ちょっとした犯罪的な行為が増えるということを経験したことがあります。そういう時期に何ができるのかというのは、ほとんど何もなくて、やはり逃げるしか仕方がないと思っただけでもあります。しかし、そのような状態と今の日本の状態を考えると、日本ははるかに平和だと私は思います。問題はいっぱい増えてきているけれども、それでも平和だと。それを、これ以上つぶさないために何ができるのかというふうに解釈をして、お答えさせていただきます。

私は、先ほどのサンチャゴさんがご紹介された“Culture of Peace”ですが、平和の文化というのは、平和でなくても文化というのは、それがなくなって初めて気が付くというふうにも考えています。

アフリカの、紛争地ではありませんが、ケニアのナイロビ大学の小児科の名誉教授とお話をしたときに、アフリカは、日本のように高度な文化がある国ではない。非常にプリミティブな、素朴なと私は思うんですが、そういう文化があった。それが壊れたことにおいて、先ほど司会の佐藤先生がおっしゃいましたが、育児、子供を育てる環境がめっちゃめっちゃになっていると。その子供を育てる環境をめっちゃめっちゃにしているものは2つあって、1つは紛争とエイズだと思います。紛争で、先ほど申しましたように、民族対立になってしまうと、手を出したくても手が出せない。やはりエイズで両親が亡くなったような場合、その子供に手を出さないという地域の連帯がなくなっていることにおいて、子供たちは本当に育つべき環境を持っていない。そこで、私が言ったのは、まあ、食べ物や水という体の栄養だけではなくて、子供たちには心の栄養が要りますねと。それをどうやって守るのかということは、それぞれの地域、国によって実は違うと思います。

しかし、私は十数年東京に住んでいて、それから福岡に来て、福岡は実はものすごく、ほとんど毎月のように何かお祭りがあります。そのお祭りがあるということ自体が私はとても立派な文化だと思います。お祭りを維持すること、これも実は本当はお金だけでなく、人びとの膨大なエネルギーがかかっていると思います。私はそういうものを持ち続けるということは、地域の住民が参加しないことには絶対できないものだ。そういう意味で、できるだけお祭りには参加するように私自身もしています。やじ馬の一人としてですけども、寂しいお祭りよりはにぎやかなお祭りの方がいいと思って出掛けていますが、私が何ができるのかということに対して答えはありません。しかし、そういうその地域というものを維持することに自分が参加していくことというのは、誰でもできることではないかと思っています。

佐藤

はい、ありがとうございます。どうぞ、古沢さん。

古沢

私は一度壊れたものは元のままに戻すことはできないと思います。元に戻らないからこそ、壊してはいけないものがあるのだと考えています。

どうしたら平和は戻るのか。ご質問に答えるべきは、私たちではなく、現地の人たちではないかと思います。例えばこの問題に関して東ティモールの女性たちの見解はふたつあります。

ひとつは、今女性たちが直面しているDVの問題を自分たちの力で克服することができたら、自信がつき、平和で民主的な社会もつくれるではないかという声です。だからDVは家庭内の問題だと矮小化することなく、DVの根絶から暴力の文化を改める作業を始めてもよいのではないかというのです。

もうひとつは、暴力の被害を受けた女性たちは犯罪者がきちんと裁かれることを望んでいます。犯罪者が裁かれることによって、自分は被害者であることが社会的に認知されると思っています。また、犯罪者が裁かれることは「和解」の前提条件でもあると言っています。例えば、東ティモールの例で言えば、1999年の暴力を計画し実行したインドネシア軍の高官や反独立派民兵の指導者は、多国籍軍が来る前にインドネシア領に逃げており、ほとんどが東ティモールにはいないのです。その人たちの中には、女性に対する性暴力の実行犯もいるのですが、インドネシアでは起訴もされていません。日本政府は、こうした問題を解決するために、公正な国際的裁判の構築を支援し、その枠組みに協力するようインドネシア政府にはたらきかけを行なうこともできるはずです。

佐藤

どうもありがとうございました。残念ながら最大延長4時までだろうと言われてしまっております。もう4時1分を過ぎたのですが、何とか目をつぶってもう1問だけ、せっかく今書いて持ってきていただいたので、できれば発言いただきましょう。クロダカオルさん、どちらですか。はい、最後の質問ということで、よろしいですか。ほかにもう絶対一言言いたいという方、いいですね。では、この辺で最後の質問させていただきます。はい、ごめんなさい、どうぞ。

クロダカオル

男の人たちが殺され、子供も殺されて、戦う人がいないというお話がありました。私は、やはり子供を教育していくことから始めることが、平和構築への一番間違いのない方法だと思いました。人間らしい人間を育てる本当の教育をしていくことが、紛争の解決や予防にとって大事だということを痛感しました。

佐藤

どうもありがとうございました。すみません、司会の不手際で、押し迫ってしまいました。最後に教育の問題が出ました。非常に重要な問題で、やはり世代を継ぐ問題でありますので、平和の問題、いろんな議論ができるかと思えます。

最後にまとめとして、イリイチという哲学者が言うておりますけれども、いわゆる中心の人にとっての平和というのは、周辺の人にとっての暴力に過ぎないという意味で、つまり平和というのはひとつの概念ではないということです。誰のための平和かということ常を問わないといけないということです。

古沢さんの方で指摘されましたけども、国連ですらある種その辺を間違っって本当に必要な人に援助が届かずに、むしろ紛争を長期化してしまうとか、あるいは助長してしまう。これは日本のODAもそうです。よかれと思ってやった我々の国民の税金が、現地の人々を苦しめているという事態もあるわけです。それはやはり、現地の人々から学ぶ姿勢がないということです。

ですから、教育というのは我々が教えてやるということではなくて、我々自身が学んでいく、現地の人から学ぶ。先ほど午前中に出ましたように、被害者から学ぶ、難民から学ぶ。こういった点で初めて我々は、そういう意味で理解して正しい援助へ近づくことができるんだと思えます。そういう意味で、今回いろんなそれぞれの方、サンチャゴさんには遠いところから来ていただいて、ある種、途上国における紛争の現実ということに根差したお話でした。

大変残念ですけども、司会として一番つらいのは、この時間がないということなのです。また全体会議もごさいますので、ぜひそこにも残っていただいて、最後のいろいろ、今後、またこれを機会に、それぞれの各自の方がいろんな形でアクション、行動を起こしていただきたいと思えます。

それでは、これで少し長引きましたが、セッション1を終わりたいと思えます。どうも皆さん、ご協力ありがとうございました。

司会

限られた時間の中で貴重なご議論をいただきまして、本当にありがとうございました。いま一度、パネリスト、コーディネーターの方々に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

このあと引き続き、5階の大セミナールームにて全体会を開催いたします。長時間にわたりまして、皆さま大変お疲れのこととは思いますが、ぜひともご参加いただきますようお願いいたします。全体会では、各分科会の報告、それから会議の成果といたしまして、宣言の取りまとめを行います。ぜひご参加くださいますようお願いいたします。

第1分科会にご参加いただき、本当にありがとうございました。